

<実践報告>

『日本目録規則 2018 年版』に基づく「情報資源組織演習」実践例

蟹瀬智弘

1. はじめに

従来使用してきた『日本目録規則 1987 年版』(以下 NCR1987) は、基本的に目録カードを作成するための規則であったので、演習授業では目録カードを作成するか、もしくは紙に目録カードに相当する内容を書き込むことで演習できた。もちろんその情報を PC に入力することも可能であった。しかし『日本目録規則 2018 年版』(以下 NCR2018) はデータのエレメントの種類とその内容に関する規則に限定され、完成形はシステムにより多様となるため、演習の方法には工夫が必要となっている。

筆者は複数の大学の「情報資源組織演習」の科目において、2021 年度より NCR2018 を使用した演習をおこなってきた。2023 年度前期までで科目数にしてのべ 15 科目相当である。引き続き 2023 年度後期においても 4 科目相当で NCR2018 を使用している。ほとんどが PC を使用した入力であるが、2023 年度前期に紙だけによる演習を 1 科目実施し、2023 年度後期に PC と紙の併用による演習を 1 科目実施中である。本稿はこの経験をまとめることで、今後 NCR2018 に基づいた演習を準備する際の参考になることを企図している。

2. NCR2018 について

NCR2018 については、大学で冊子が用意できればそれを使用している。pdf の参照も認めているが、冊子の方が見やすいということは強調している。用意できない大学では、幸いにして PC を使用することができるので pdf 版を参照させている。注意点として、章ごとに分かれたファイルは目次から本文へのリンクがあること、統合ファイルではそれができないが、本文を検索することはできることを実際の画面を見せながら説明している。

3. 授業の流れ

授業の 1 コマの流れは以下の通りである。

はじめにテキストおよび/または目録規則とスライドで規則の概要を解説し、テキストの演習問題で演習を行う。演習中に教室を巡回して適宜個別に指導しているが、全員が 1 問目を記録し終わったところを見計らって、1 問目の記述例をスライドで示しながら解説している。そうしないと、通路から遠い席にいる学生や画面が極端に暗い場合など、目が届かない学生がその回では対象でないエレメント(当然解説していない)と格闘していたり、根本的に記録の仕方を誤解したまま演習を続けて時間を無駄にしたりすることになってしまう¹⁾。その後、記述例を配布してスライドで示しながら注意点を解説するが、演習時間の関係で、表現形の属性の解説は著作の回の冒頭で、著作の属性の解説は表現形の解説と同時に行うことが多い。

授業の終わりに演習したファイルを LMS に提出、もしくは紙の場合は 1 ページ目(後述)を提出させて出欠を管理している。演習の内容については採点はしていない。

4. 演習方法

4.1. PC を使用する場合

4.1.1. 演習時

学生全員が PC を使用できる環境としては、①大学として BYOD(Bring Your Own Device)を導入している、②コンピュータ室で演習する、③各自の判断で持参する、の 3 パターンがある。①では学生が慣れている PC を使用できるというメリットがあるが、使用する PC によって操作が異なるため、操作方法を指導する場合には機種に関するある程度の知識が必要となる。②では PC は統一されるが、学生にとって不慣れな操作となる可能性がある。③は全員が PC を持参するとは限らないので、ファイルでの演習と紙での演習を並行すると教員の負担は大きくなる。またその場合、特に試験の際に解答速度に影響があると考えられる。

入力には Word にあらかじめ表を作成しておき、データの部分を入力させている (図 1)。但し、表を作成することが目的ではなく、入力する項目を表にするとこのようになるというだけであること、システムの入力画面がこのような形式になっているとイメージして演習するようにと伝えている。

当初は 1 つのファイルに体现形、著作、表現形、個人・団体の表を用意しておき、演習問題ご

体现形のデータ (図書)

月日	曜日	時限	科目名	担当者
/			情報資源組織演習 1	蟹瀬
学科	学年	学 籍 番 号	ふりがな	
学科			氏 名	

【問題 1】

エレメント	データ
属性	
タイトル	
本タイトル	
並列タイトル	
タイトル関連情報	
異形タイトル	
責任表示	
本タイトルに關係する責任表示	
版表示	
版次	
出版表示	
出版地	
出版者	
出版日付	
シリーズ表示	
シリーズの本タイトル	
シリーズに關係する責任表示	
シリーズ内番号	
サブシリーズの本タイトル	
サブシリーズ内番号	
機器種別	
キャリア種別	
数量	
大きさ	

図 1 体现形のデータの表 (図書)

とに別ファイルを作成していた。しかしこれだと特定の資料についての記録を作成するという意識になるので、関連の記録、特に資料に関する基本的関連を記録する必要性を感じにくいと思われる。そこで現在では体现形、著作、表現形、個人・団体の実体ごとに4つのファイルを作成し、その中に各演習問題についての実体の表を作成している。これにより、「この体现形の表現形はこれである」ことを表す関連の記録の必要性を理解しやすくなったと考えている。但し、資料種別ごとに別ファイルとし、入力の便宜を図っている。

表については、最初に1つ基本的な表を作成しておき、問題ごとに表をコピーしながら必要に応じて適宜エレメント（Wordの表の行）を追加して記録する方法と、各演習問題についてあらかじめ個別に表を作成しておく方法とを大学によって使い分けているが、限られた演習時間内に優先して理解すべき事項を考えると、あらかじめ個別に表を作成しておいた方が良いのではないかと考えるようになった。

演習する順番は、NCR2018に沿って、まず属性を記録していく。すなわち、①体现形の属性、②個別資料の属性、③著作の属性、④表現形の属性、⑤個人と家族の属性、である。体现形の属性は2回に分けて演習している。初回はタイトル、責任表示、シリーズ表示であり、2回目に残りのエレメントを入力している。当初はタイトル、責任表示、版表示を1回にしていたが、これだとタイトルを入力する際に、「これはシリーズ名なので後で記録します」という中途半端な指導になってしまう。書誌階層を整理して理解するためにはタイトルとシリーズ表示の演習は同時の方が良いと考える。

著作の識別子としてVIAF IDを使用している。これにより、世界中のデータと関連付けることができるということ意識してもらおうと同時に、演習問題の多くはVIAFに登録されていないということも認識してもらいたいと考えている。

目録規則を確認しながら演習するようにと伝えても、どこを見たら良いのか探すのも大変で参照することが少ないので、演習に必要な条項番号をあらかじめ提示している。例えばタイトルの説明中に、ルビについては「#2.1.1.2.3 ルビ、#2.1.9.2.1 ルビを含むタイトル」を参照するように、また部編名については「#2.1.1.2.8B 部編、補遺等のタイトルと共通するタイトルの双方が表示されている場合、#2.1.1.2.8C 部編、補遺等のタイトルが表示されていない場合」を参照するように示している。

しかしながらそれでもなかなか目録規則を参照せず、中にはOPACなどを検索して表示されるデータを見ながら入力する学生も散見される。目録規則が異なるので参考にしないようにと言ってもなかなか聞き入れられないので、入力用のファイルのエレメント名のところに目録規則の条項番号を書き込んだところ、目録規則への参照が増えたように思われる（次ページ図2）。

個別資料の属性はエレメントを解説するだけで実際の演習は行わず、著作、表現形の属性の記録に進む。

その後アクセス・ポイントを記録するが、著作の典拠形アクセス・ポイントの構築には創作者の典拠形アクセス・ポイントを使用するため、①個人と団体の典拠形アクセス・ポイント、②著作の典拠形アクセス・ポイント、③表現形の典拠形アクセス・ポイント、の順に演習している。最後に関連の記録であるが、実体ごとに、①体現形から表現形への関連、②著作と関連する個人・団体との関連、③表現形から著作への関連と、表現形と関連する個人・団体との関連、の順としている。一部のテキストにある体現間の関連(集合書誌単位への関連)は、典拠形アクセス・ポイントの規則がなくISBDによる記述は負担が大きいため省いている。これ以外に、団体と団体の関連(「前身団体」「後身団体」)、逐次刊行物の場合は「継続前(著作)」「継続後(著作)」を記録することもある。

ファイルへの入力の特長としては、①データの追加、削除、移動が容易である、②エレメントの追加が容易である、などが挙げられる。

演習後に記述例を示して解説するが、学生には修正する場合はどこ

を間違えたのかわかるように修正するように伝えてある。Wordのコメントや変更履歴を使用したり、画面にペンで書き込んだりしている。

4.1.2. 試験

試験ではエレメントで混乱しないように、あらかじめ必要なエレメントを提示しておき、そのデータのみを入力することとしている。但しすべてのエレメントを固定してしまうと理解の度合いを測れないことがあるので、記録しないエレメントも表示していることがあ

著作のデータ (図書)					
月日	曜日	時間	科目名		担当者
/			情報資源組織演習1		講師
学科	学年	学籍番号	ふりがな		
			氏名		
【問題1】					
エレメント			データ		
属性【#4】					
著作の優先タイトル【#4.1】					
著作の異形タイトル【#4.2】					
著作の形式【#4.3】					
著作の日付【#4.4】					
著作の識別子【#4.9】					
アクセス・ポイント【#22】					
著作に対する典拠形アクセス・ポイント【#22.1】					
関連			関連指示		
著作と関連を有する個人・家族・団体【#44.1】					
【問題2】					
エレメント			データ		
属性【#4】					
著作の優先タイトル【#4.1】					
著作の異形タイトル【#4.2】					
著作の形式【#4.3】					
著作の日付【#4.4】					
著作の識別子【#4.9】					
アクセス・ポイント【#22】					
著作に対する典拠形アクセス・ポイント【#22.1】					
関連			関連指示		
著作と関連を有する個人・家族・団体【#44.1】					

図2 目録規則の条項番号あり(図書著作)

る。例えば、翻訳者を著作と関連付けるか表現形と関連付けるかは理解度を測る重要なポイントであるので、「著作と関連する個人・団体」「表現形と関連する個人・団体」の欄を多めに用意しておき、翻訳者を著作と関連付けたら減点するなどしている²⁾。

なお、典拠形アクセス・ポイントや関連の記録は同じデータを繰り返し記録するので、例えば著作の優先タイトルを間違えると、著作の典拠形アクセス・ポイント、表現形の典拠形アクセス・ポイント、表現形から著作への関連、体現形から表現形への関連についてすべて間違えることになる³⁾。

採点はエレメントごとに 1 ポイントとし、答案のポイントを正当の合計ポイントで割って所定の満点に換算して評価している。

なお、翻訳ものの著作の優先タイトルや同じく原著者の優先名称の誤答率が極めて高い。授業では複数問について演習し解説しているにも拘らず、理解が困難なのだと思う。しかしこの部分こそ NCR2018 の大きな特徴でもあり利点でもあるので、毎回出題するようにしている。

4.1.3. 問題点

Word の操作に慣れていない学生も一定数存在するが、この演習で必要な機能は使用できるようになってもらいたいので適宜指導するようにしている。

最近ではあらかじめ、①行の追加方法、②コピー、切り取り、貼り付け、Undo、上書き保存のショートカット、③データの移動（ドラッグアンドドロップによる）、④[F7]（機種や設定によっては[Fn]+[F7]）によるカナ変換、⑤読めない漢字の入力方法（手書きや部首による）、⑤変換を確定した文字列の再変換、を説明するようにしているが、実際に演習を始めるとコピーを使用せずにすべて手入力したり、右クリックでメニューを出してコピーを選択したりする学生も多い。演習中に改めて説明すると「便利だ」と驚くので、最初にまとめて解説しても実感がないのであろう。今後は解説の際に学生にも実際に操作してもらうことを考えている。

Word を使用する最大の問題点は、通常、単語などの先頭が大文字に自動変換されてしまうことであろう。設定を変更することもできるが、ファイル単位ではなく Word 全体での設定となるため、演習用のファイルのみ自動変換を停止することはできない。授業の最初に設定を変更するように呼び掛けることも可能であろうが、全員が一斉に対応することは期待しにくいし、元に戻す手間を考えると躊躇する。そのため、入力中に先頭が大文字に自動変換されたら、すぐに[Ctrl]+[z]を押下して元に戻すように説明しているが、大文字の部分を消して入力し直す学生も一定数存在する。

4.2. 紙への書き込みによる演習

4.2.1. 演習時

紙による演習を開始した時点では既に PC による演習を 2 年間実施した経験があったので、その経験を踏まえて実体ごとに表を作成し、それをプリントしてホチキス止めて配布

した。その際、出欠を確認するために 1 ページ目に学籍番号や氏名を記入する欄を設け、授業後にそのページを提出させている。その際、復習のために写真を撮っておくことを推奨しているのは NCR1987 の演習の時と同じである。

既述のようにファイル入力の場合はエレメントの追加・挿入が容易であるというメリットがあるが、紙の場合はそれができないので、あらかじめ必要なエレメントを作成し、記入欄を用意しておく必要がある。不要な欄も作成しておいて記録の際に判断することもあるが、欄が多くなるとページ数が増えて関連の記録などでデータを探す際に扱いにくくなるという懸念がある。

出版表示など、サブエレメントがあるエレメントは 1 行にまとめることも考えられるが、せっかく個別のエレメントになったのだからわかりやすく別の行に記入するようにしたい。

なお、紙での演習と並行する場合には PC での演習についても、公平を期すために紙のフォーマットに合わせてエレメントを固定することになる。

エレメントだけでなく、書き込む面積も固定されてしまう。文字数が多いエレメントについてはあらかじめ行幅を広くしておく必要があるが、そのことで書き込むべきデータが推測できてしまうという弊害がある。

紙への書き込みの最大のメリットは赤入れが容易であるということだろう。試験前に、自分が間違えたところをざっと見返すには紙が向いていると思われる。

4.2.2. 試験

試験の際は、PC での試験と同様にあらかじめ必要なエレメント(欄)を作成しておいて、そこに書き込むようにした。今後はエレメント名を空欄にしておいて、エレメントの選択も解答に含めるなども検討している。

PC ではコピーで済むデータを繰り返し手書きすることで、写し間違いがあると減点対象になり不利になる可能性がある。

4.2.3. 問題点

紙への記録のデメリットとしては、書き直しに手間が掛かるということがある。NCR1987 の演習でも同じだったが、書き込むデータを間違えた場合や書くエレメント(場所)を間違えた場合には、消して正しい場所に書き直す必要がある。

さらに NCR2018 では著作の優先タイトルと創作者の典拠形アクセス・ポイントを組み合わせ著作の典拠形アクセス・ポイントを構築したり、それを使用して表現形の典拠形アクセス・ポイントを構築したりして、さらにこれらを関連先の情報として記録するなど、同じデータを繰り返し記録するところがある。PC ではコピーすれば済むものを、手書きでは改めて書き込むことになり、時間が掛かってしまう。関連の記録を簡単にするためには関連先のデータとして識別子を使用することが考えられる。例えば問題 1 の表現形は「E1」など単純なものにすれば効率は良いが、これだと典拠形アクセス・ポイントを構築する意味がなくなってしまうので、現時点では実施していない。

また、体現形の記録の 2 回目や、典拠形アクセス・ポイントの構築や関連の記録などに際

して、以前書き込んだものを持参する必要があるが、忘れてくる学生がいることがある。演習の内容によって再度白紙を渡すこともあるし、関連の記録の場合は関連先の典拠形アクセス・ポイントを再度構築しながら書き込むように指導している。

5. おわりに

以上、現時点での演習方法をまとめてみたが、記録すべきエレメントの提示方法や提示する種類、目録規則への効果的な誘導方法、PCと紙との格差解消などについて、今後も検討が必要である。

また、2024年度からは、PCもWiFiも使用できず、かつNCR2018も用意できない教室での演習を行う予定である。この場合は目録規則についてはテキストと配布資料を参照し、可能であれば通信可能なデバイスを持参するか、あらかじめpdf版をダウンロードしておくことを推奨することなどを検討中である。

-
- 1) 学生のPCの画面を講師卓で表示できるシステムの場合はすべての学生の画面を見ることができ、その環境では演習していない。
 - 2) 記録すべきデータを誤答した場合は減点しないが、記録すべきでないデータを記録した場合は減点している。
 - 3) ごく稀に、例えば著作の優先タイトルを間違えているにも関わらず、表現形から著作への関連を正答できているなど、整合性が取れないこともある。これはこれで原理を理解できていないので減点したいところだが、評価が複雑になるので現在はそのまま正答として採点している。

(かにせ ともひろ)

2023年10月20日受理